稲（イネ科）

みんなもおなじみのお米作り。
少しだけなら、田んぼでなくても、大きめのバケツや穴のないプランターを使って、栽培することができるのよ。
長い期間がかかるけれど、私たちの食生活に欠かせないお米を収穫できるわ。
ぜひチャレンジしてみましょう。

▼栽培手順

1 発芽用のもみを用意します。
買ってくるか、農家さんに分けてもらいましょう。
玄米の中にもみが混ざっているときがありますが、これは発芽しないことがほとんどです。

2 浅い容器にもみを入れて、ひたるくらいの水を入れます。日の当る所におきます。
水が減ってきたら足して、乾燥しないように気をつけます。

3 3～5 日くらいで、もみから根が出てきます。

4 まだ、そのままの状態でおいておくと、根のそばから芽が出てきます。

5

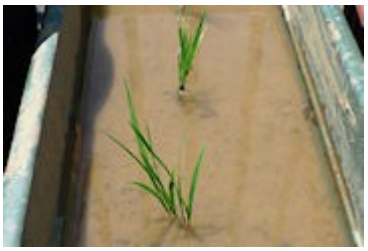
やわらかくて目の細かい土か、発芽用の土を用意します。
十分しめらせて、根の出たもみをひとつずつ植えます。
いつもひたひたの水があるようにしておきます。

6

10cm くらいに育つまで、水を切らさないように育てます。
この間に、田植えができるように、土作りをしておきます。
水田の土に近い、粘土質の土と肥料を混ぜます。穴のない深い容器に、15cm 高さくらいに土を入れ、水も入れます。
5cm ほど水がたまるようにしておきます。

7

苗が 10cm くらいになったら、水をたっぷり含ませ、根を傷つけないように取り出します。
2～3 本をひとかたまりにしておきます。
バケツなどで、1 かたまりだけを植えるときは、5 本程度にします。



8 用意しておいたミニ水田に、ひとかたまりの苗を差し込むようにして植えていきます。
バケツなどは中央に植え、大きな箱の場合は、苗と苗の間を 10cm ほどあけます。
田植えをしたときは、頼りないですが、3 日くらいでしっかり根付きます。
その間に激しい雨などが降るときは、雨や風のこないところによけておきます。

9 長い時間日がよく当たり、風通しの良い場所を探して育てます。
水田と違って、バケツなどの箱で育てるときは、水がすぐに蒸発してしまいます。
いつも 3cm くらいは水が入っているように、気をつけましょう。

10 しばらくすると、根元から「分けつ」して増えていきます。

11

どんどん成長します。
1 カ月くらいで立派な稲になります。
気温が高いとたまった水の温度も上がり、お湯のようになります。
そうすると稲が弱るので、温度の高い水を捨てて、冷たい水を入れてあげます。
氷を入れてもいいでしょう。

12

さらに 1 カ月ほどたつと、緑のかたい稲穂が出てきます。

13

稲の花がいっせいに咲きはじめます。
この花は、数時間でしぼんでしまいます。

14

稲穂がふくらみ、たれはじめます。
このころには、スズメや野鳥が稲穂をねらってよってきます。
早めにネットを張りめぐらせたり、鳥のこない場所にうつすようにしましょう。
お米の粒は、鳥の大好物です。
少しのすきまからもこわがらずに入ってきて、あっというまに食べつくしてしまうので、注意しましょう。
※鳥よけのために、ネットやかこいをします。

15

稲穂が熟しはじめて、茶色くなってきます。
十分にふくらんで、茶色く熟したら、水をあたえるのをやめて、乾燥させます。

16

このくらいになったら、稲刈りに入ります。
稲の根元を、はさみで切り取ります。
※少しだけ緑が残っています。

17

稲刈りが終わったら、1 週間ほど日に当てて乾燥させます。

18

脱穀して「もみ」と「わら」にわけます。
わらは野菜栽培のしきわらに使いましょう。
すぐに食べないときは、「もみ」のまま、涼しいところに保存するとおいしいお米が食べられます。
「もみ」はもみすりをして、玄米にします。
※気候の変化や栄養不足で、中身のないもみもできます。